

Title	日本・韓国出土轡の法量比較検討：銜と引手の長さ に注目して
Author(s)	田中, 由理
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 2007, 41, p. 1-25
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7551
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

日本・韓国出土轡の法量比較検討

—銜と引手の長さに注目して—

田 中 由 理

1. 本稿の課題

(1) 分析の視角

古墳から出土する馬具には金メッキが施されるものが多く、きらびやかに飾られた当時の馬を偲ばせる。そのためにこれらの馬具に対して、実用なのか、非実用なのかという問題がしばしば議論されてきた。轡の実用性に関しても、これまでも多くの論考において言及されている。小野山節や山田良三、大谷猛は銜の部分に使用痕があることを指摘しており（小野山 1959、山田 1974、大谷 1976）、尼子奈美枝は鉄製素環鏡板轡を「実用的な馬具」の代表格、金銅装の板状鏡板付轡を「儀仗的な馬具」という認識に対して異議を唱え、馬を制御するという機能上、素環状の鏡板も板状の鏡板もなら差はないことを指摘している（尼子 1997）。また近年注目されてきた、修理痕を持つ馬具も、実用であることをしめす根拠となろう（松尾 1996・栗林 2004）。

この中で、実用性を、実際に馬の口に入る銜の長さや引手の長さから検証しようとする論考もある（松尾 2005）¹⁾。松尾昌彦はまず古墳殉葬馬に伴う馬具 5 例の銜長を調べ、11～15.5cm とばらつくことを指摘した。そしてこれを、現在の乗馬用の銜が長さ 10.5cm から 14.5cm まで 1 cm 間隔のサイズであることから裏付けられるとしたうえで、検討の範囲を、実見し計測値の確かな長野県出土例 40 例に広げ、引手長もあわせて比較した。

その結果、銜長の平均値は 11.55cm であり、引手長との相関関係は必ずしも明確でないとする²⁾ 一方、銜長の度数分布を近世轡の銜長度数分布と比較しており、古墳副葬轡における銜長の集中域の狭さを指摘している。

松尾昌彦の検討は、銜・引手長という轡の機能を考えるうえで、極めて重要な数値を取り扱っており、また検討の過程において、古代の馬の体高や近世の轡の計測値や現在の馬の調教などにも触れ、大変示唆に富む。しかし法量分析の対象は、一人で実測できる数には限りがあることもあり、例数が少ない。そのうえ、日本列島の長野県域といった限られた地域を対象としたために、地域性や時期などの傾向を抽出できていないといえる。

そこで本稿では、計測の精度を若干下げたとしても、分析対象を広げて、より明確な傾向を抽出していくことを目的とする。日本列島の馬具だけでなく、日本列島の馬具の故地でもある朝鮮半島も対象としたい。近年、鏡板の型式差にとらわれずに轡全体を見渡し、大きな傾向を掴んでいく研究手法は、朝鮮半島出土馬具を対象として銜や引手の製作技法に注目した諫早直人の研究（諫早 2005）などにおいても見られる。筆者も同様な目的意識を持ち、多種多様な轡全体を見渡すことのできる属性として、銜と引手の法量に注目したい。

（2）分析の方法

今回の検討では日本列島および朝鮮半島出土の多様な型式の轡を取り上げ、銜と引手の長さをグラフ化して、法量分布を検討したい。

資料に関しては、それぞれの地域ごとに型式、時期などまんべんなく資料を揃える必要があるため、すでに発表されている集成も利用した（東海古墳文化研究会 2006、関・宮代 1988、宮代 1995・1996、宮代・白木原 1994、宮代・谷畑 1996、群馬県古墳時代研究会 1996）。韓国の出土資料に関しては、伽耶諸地域、新羅地域、百濟地域における 4 世紀から 6 世紀代

までの資料を網羅するよう集成した。今回の検討ではこのうちの銜と引手、双方の長さが明らかなもののみを取り上げているため、検討対象から漏れた例も多い。また銜を組み合わせた長さではなく、銜の片方の長さを計測対象としたため、三連式の轡は検討に用いず二連式の轡のみを対象とする。

計測値に関しては、本来は正確を期すため、自分で実測したものが望ましいが（松尾 2005）、今回はなるべく多くの資料を網羅的に分析することを心がけたため、①報告文に長さの表記のあるもの、②実測図のうち展開図が描かれているもの、③写真から、銜・引手がある程度水平に置かれており、現状実測図での長さが実際の長さとも一致すると推測されるものは、全て対象とした。計測する部位は、これも本来は松尾がしたように、馬の口に入る部分・連結する部分を考慮し環の中心間を計測するほうがよいが、今回は資料数を多く確保することに重点を置いたために報告文の数値を利用したこともあり、単純に、銜および引手の全長を用いた³⁾。

時期に関しては、4世紀代から7世紀前半まで対象とした。日本出土例の年代はT G 232期および陶邑田辺編年（田辺 1966）のT K 73型式期を5世紀前葉、T K 216、T K 208型式期を5世紀中葉、T K 23、T K 47型式期を5世紀後葉、M T 15、T K 10型式期を6世紀前半、T K 43型式期、およびT K 209型式期も含めて6世紀後半とし、それ以降は7世紀前半とした。韓国に関しては、馬具の相対編年は安定しており、これと日本の馬具との交差編年を考慮すれば5世紀半ばまではたどることができる。5世紀前半から4世紀までの絶対年代は、筆者自身まだ詰めきれていないが、本稿では田辺編年のT K 73型式期が福泉洞10・11号墳と対応するという立場をとっておきたい（酒井 2001・白井 2003）。また、新羅の編年に関しては、早乙女雅博の編年（早乙女 2000）、百濟編年に関しては、権度希の馬具編年も参考にした（権度希 2006）。

まず、地域と時期、型式、製作技術、それぞれの項目に関して、日本出

土例と韓国出土例の分析結果を述べたのち、その性格について考察していきたい。

2. 地域と法量

(1) 日本の事例 (図1)

日本に関しては、東海4県93例、群馬・埼玉県50例、奈良・兵庫県47例、九州の佐賀県・熊本県・宮崎県の3県26例である。

どの地域も分布はあまり散らばらず、基本的には銜・引手の長さが比例する傾向を見せながら、集中する。ただし、地域ごとに見ると、分布の傾向が若干異なることが注目される。最も顕著に異なるのは九州で、銜10cm以上、引手15cm以下に分布が見られ、これは他地域にはない様相である。また、東海では銜・引手が長いものの分布がほかの地域に比べてやや多い。

では、時期ごとの変遷を合わせてみることにしよう。時期を追って短くなるなどの一定の方向性は見られない。各地域に共通する傾向を見ると、5世紀代、6世紀前半には分布がばらつくが、6世紀後半になると、銜8～10cm、引手15～20cmに集中してくることがわかる。このことから生産がある程度安定してきたことも予想されるが、7世紀になると、法量分布はばらつき、地域差が現われてくるようである。ただし6世紀後半の集中は、九州では全く起こらず、むしろその時期に、前述のような九州特有の法量分布域への集中が起こっていることは注目されよう。

(2) 韓国の事例 (図2、3)

韓国の事例は139例を対象としており、地域ごとにみたものが図2である。地域区分は金官伽耶地域(釜山・金海)、大伽耶地域(高靈・陝川)、阿羅伽耶・小伽耶地域(咸安・固城・晋州)、新羅地域(慶州・大邱・慶山)、

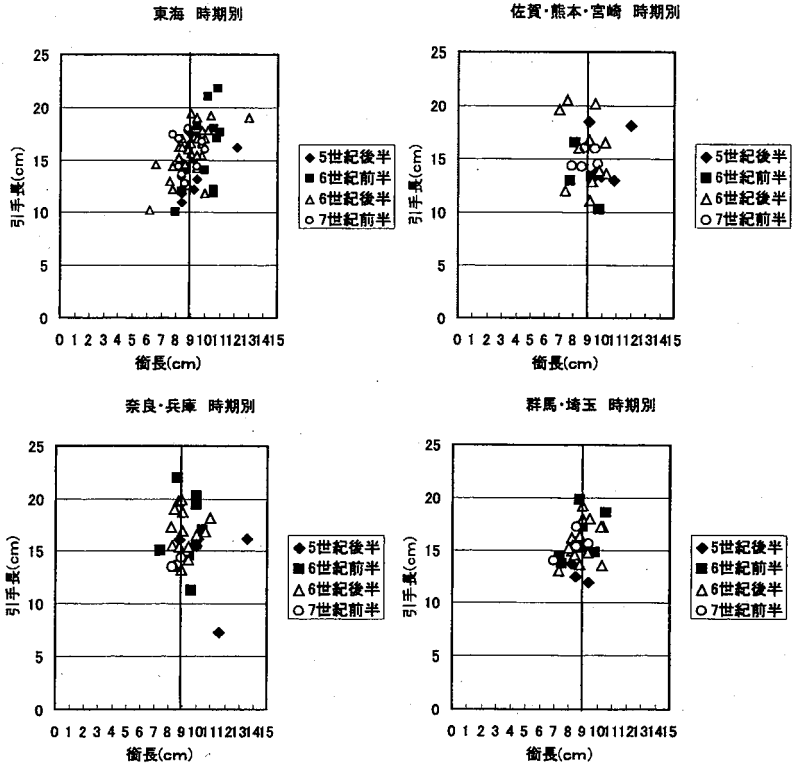


図1 日本列島・時期別の衡・引手長 法量分布

尚州、百濟地域（清州・清原・ソウル）としている。

まず韓国出土例の全体の法量分布を見ると、日本例が右斜め上方へ比例して上がっていく分布を見せたのに対し、衡長が一定で、引手の長さが変化する垂直方向の分布を見せることに気づく。また、衡長の分布域は、日本例では9 cm を跨ぐように分布しているのに対し、韓国例では9 cm より小さくなるものがほとんどみられない。地域ごとに見ると、その法量分布の地域差が極めて明瞭であることが注目される。特に金官伽耶、大伽耶、慶州周辺といった地域では、明確な集中域が見出される。百濟地域のもの

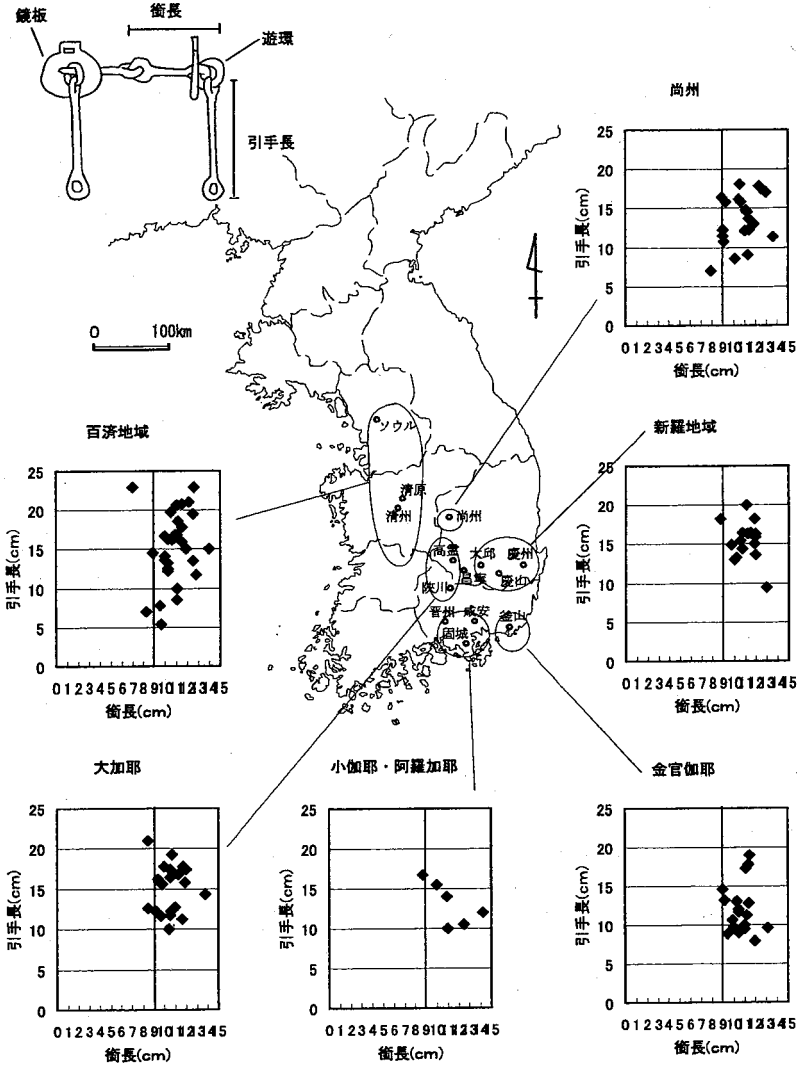


図2 朝鮮半島・地域別の銜・引手長 法量分布

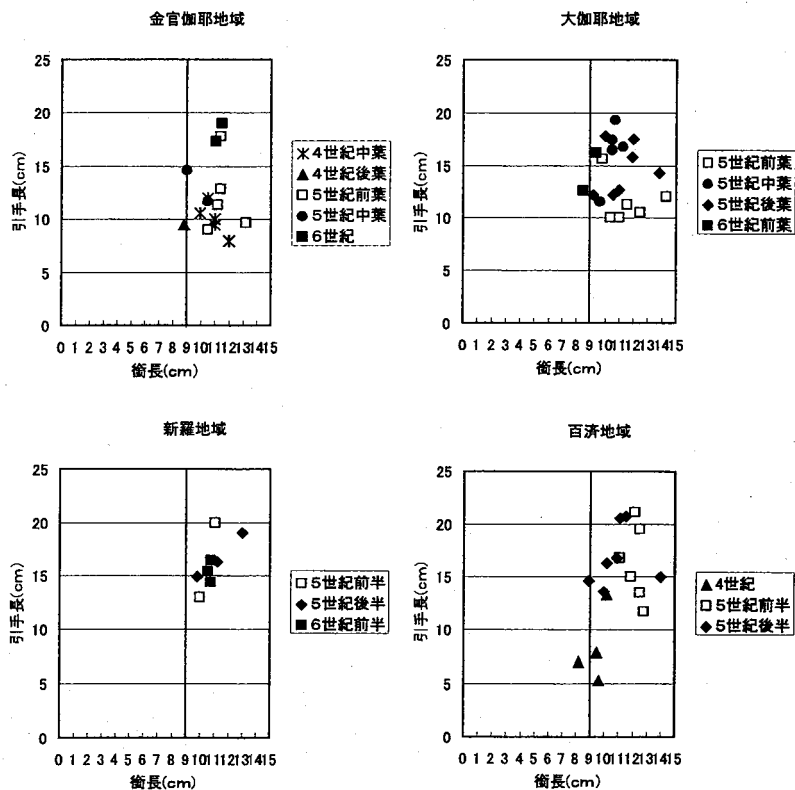


図3 朝鮮半島・時期別の銜・引手長 法量分布

は引手の長さが多様で、短いものから、ひときわ長い一群をも含む。新羅地域は銜長10～12cm、引手長15cm前後に比較的集中して分布する一方、大伽耶地域や金官伽耶地域では引手の法量分布の中心は15cmではなく、その上下に分かれて分布する。また、新羅と百濟の境界付近にあり、時代によって属する領域が変化した尚州では、それを反映するかのように分散した分布を示す。

では各地域の時期ごとの長さを調べてみよう(図3)。金官伽耶地域では、4世紀代の引手の長さに関しては、10cm以下のものが中心である。5世

紀代に10～13cm程度となり、時期を追って長くなるということができ
るが、興味深いのは18cm程度の引手の長いものも同時にあらわれる点で
ある。分布が2箇所に分かれる現象は大伽耶地域でも見られる。金官伽耶
と同様に、5世紀前葉の例に引手長の短いものが多いが、引手の短いも
の(10～12cm)と長いもの(15～18cm)は5世紀中葉以降、同時に併
存するようである。百濟地域においては、4世紀代にひときわ短い一群が
あるが、その後は20cm以上の長い引手と13～17cmの短い引手が併存し、
同様の傾向を見せる。新羅地域では例数が少ないため、その傾向を明確に
は見出しがたいが、興味深い点は、5世紀後半および6世紀前半の分布が
銜10～11cm前後、引手15cm前後に集中して見られることであり、他
地域より集中の度合いが顕著である。

3. 轡型式と法量

(1) 日本の事例(図4)

元来、板状の轡はしばしば銜が欠損して出土すること⁴⁾に加え、日本
の馬具の多くが素環状鏡板付轡であることから、今回検討した轡の大部分
が素環状鏡板付轡になってしまうという資料の偏在が問題となる。そのた
め資料数が多く、素環状鏡板付轡以外の轡が一定量見られる東海地域を中
心に見てみたい。

まず、素環状鏡板付轡とその他の鏡板付轡の比較である。引手長の長い
ものが素環状鏡板付轡のみであるなど法量分布の範囲は前者のほうが広い。
後者はその分布域に包含されることから、素環状鏡板付轡とその他の轡は、
銜と引手に関しては、あまり区別されることなく製作されたと考えられる。

ただし詳細に見ると、板状の轡は長短二つの分布域(銜10cm以下・引
手15cm以下および銜8cm以上・引手15cm以上)に分かれるようである。
その中の型式を細分してみると、東海地域に集中して分布することが指摘

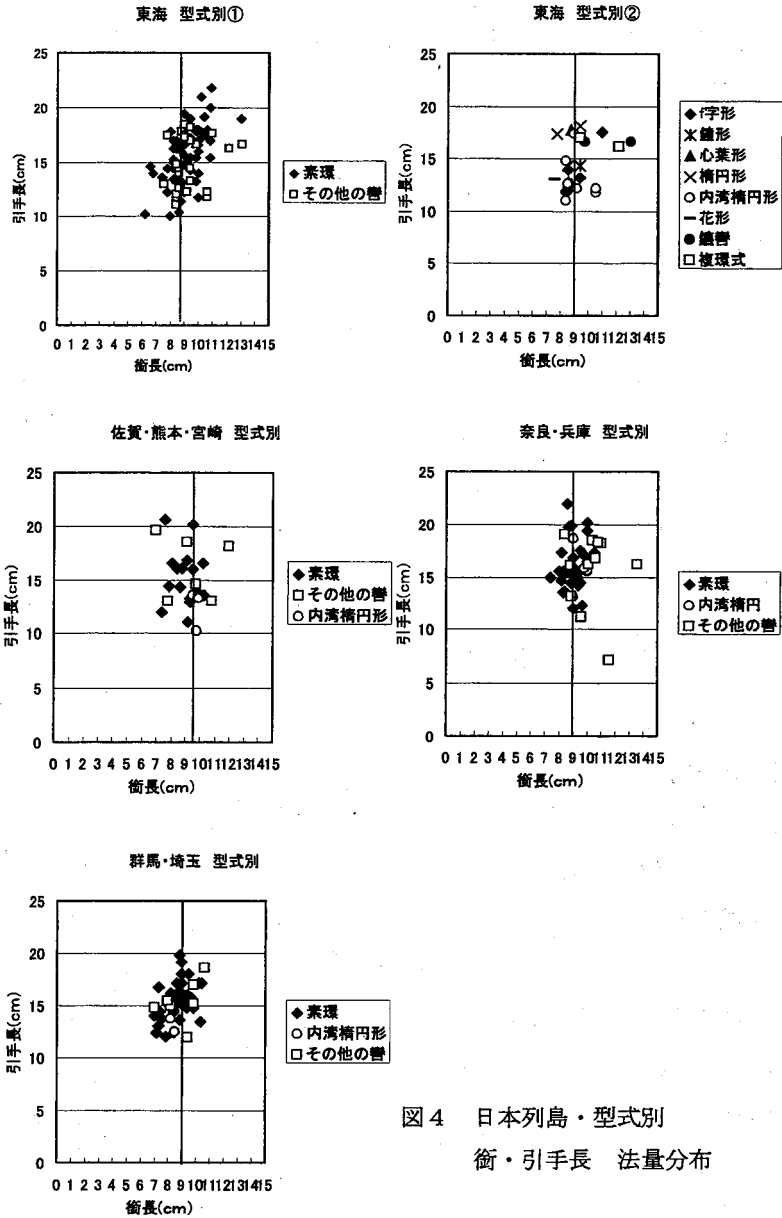


図4 日本列島・型式別
衛・引手長 法量分布

されている内湾楕円形鏡板付轡は（鈴木 2002）、銜・引手長が短い方の分布に集中していることが注目され、f字形鏡板付轡もこれに含まれる。一方、朝鮮半島的な要素が色濃い複環式や鑣轡は銜・引手共に長い分布に含まれる。ちなみに埼玉・群馬や奈良・兵庫、九州における内湾楕円形鏡板付轡の銜・引手長を見ると、埼玉・群馬、九州の例では東海と同様に短いのに対し、奈良・兵庫の例は長いほうの分布域に含まれる。こうしたことはその生産地を考えていくうえで示唆的である。

（2）韓国の事例

韓国の事例に関しては、鑣轡・環板轡・板轡（鏡板付轡）（図5）という型式をとりあげる。ここでは紙幅の関係上詳述できないが、それぞれの型式の性格や時期に関しては多くの研究がある（金斗喆 2000、柳昌煥 2006 など）。それらに関しては、型式ごとに分布を見ていくなかで補足して述べていきたい。韓国の事例では日本で見られた傾向と異なり、型式ごとに集中する分布域が明確に異なっている。これを前節で述べた地域ごとの分布とあわせて考えると、ある程度の性格付けをすることができる。

鑣轡に関しては、引手長が10cm前後から20cm前後まで幅広い分布を見せているが、15cm以上の分布が、密である。また20cm前後の長い引手はほかの型式の馬具には見られないものである。

環板轡の銜はみな9～11cm程度であるが、引手長は引手が10cm前後および15cm以上の二つの分布域に分かれる。環板轡は中国東北地方の轡の影響を受けて金官伽耶地域で生産が始まり、5世紀後半に大伽耶地域で本格的に生産される（金斗喆 2000・柳昌煥 2006）が、環板轡の法量分布は大伽耶地域の轡の分布と類似し、その生産が大伽耶地域の馬具生産とともにあったことがうかがえる。

板轡はさまざまな地域で生産されているためか、法量の分布がばらつき、

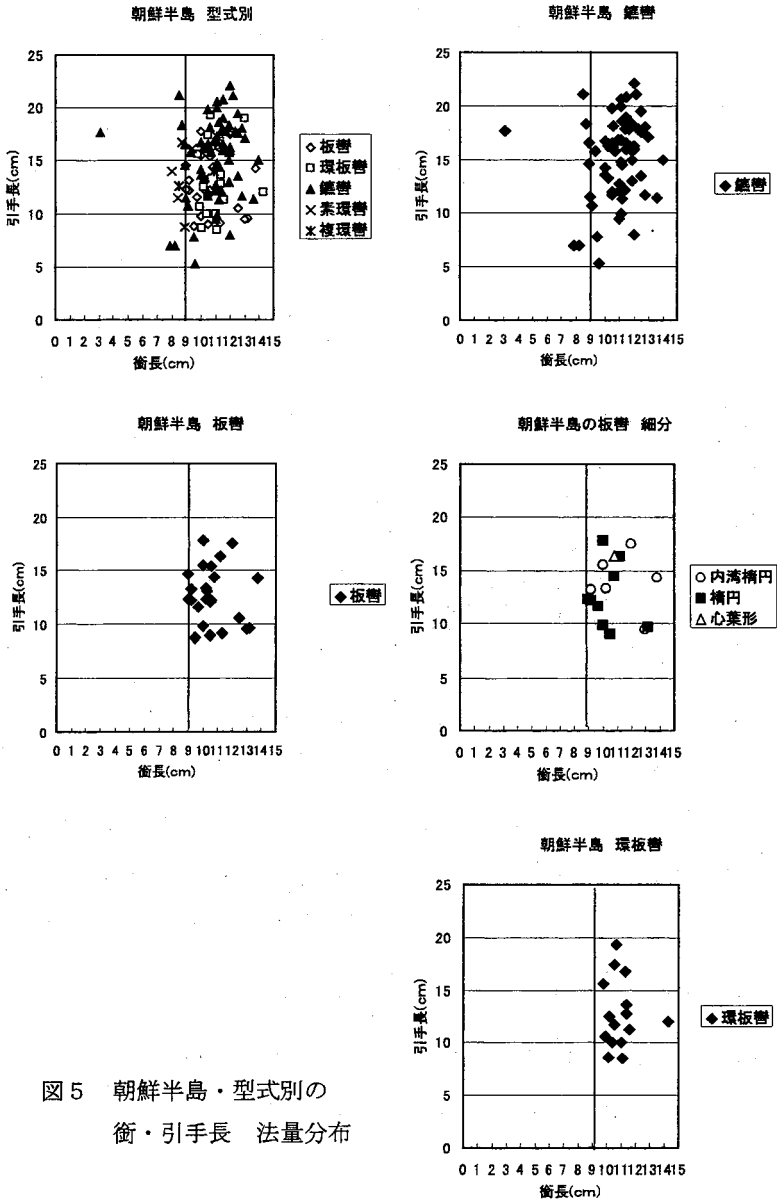


図5 朝鮮半島・型式別の
銜・引手長 法量分布

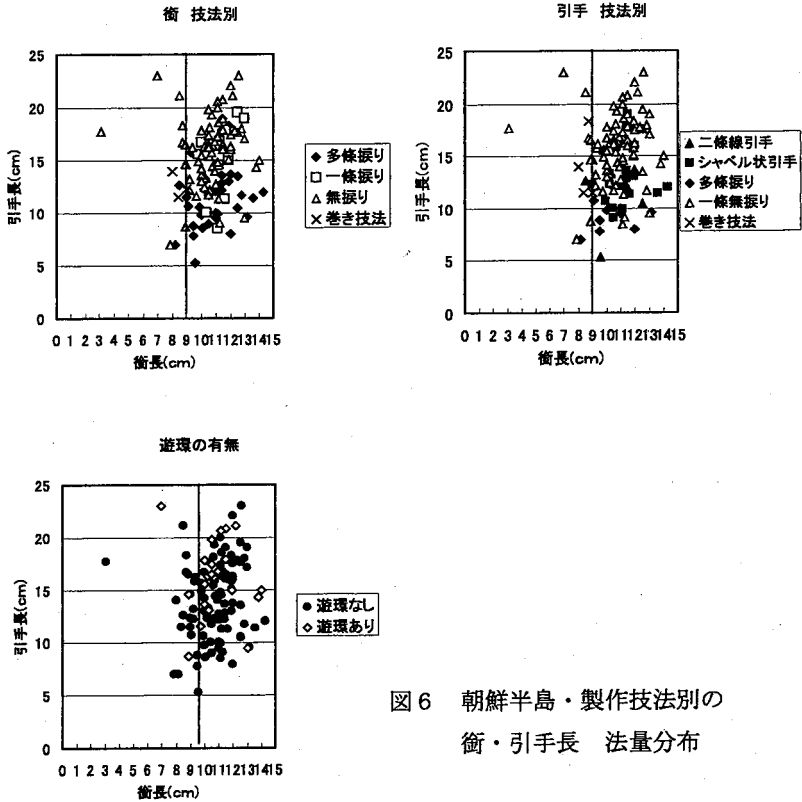


図6 朝鮮半島・製作技法別の
衛・引手長 法量分布

どの地域の分布の集中とも共通する状況が見出しにくい。しいていえば、引手長が15cmを跨ぐような分布は新羅地域の特徴と通じるだろう。

4. 製作技法と法量 (図6)

衛と引手の製作技法に関しては、韓国の事例を中心に見ていきたい。韓国出土の馬具においては、衛や引手の製作技法が編年の重要な要素となる(金斗喆 2000・諫早 2005)が、法量との関係はどのようになるだろうか。

(1) 銜と引手の製作技法

銜に関しては、古い段階に位置づけられる多條振りも新しい段階の1條振りないし無振りのものも長さはあまり変わらないが、引手長に関しては、古い段階に位置づけられる多條振り・シャベル状引手は短く、新しい無振りの引手は長いなど、相関性が見られる。

(2) 遊環のあるもの

遊環は百済の馬具の特徴であるとされ、伽耶の馬具を見る際のひとつの指標となっている(金斗喆 2000)。法量分布から見るとどのような特徴が見出せるだろうか。図6を見ると、20cm前後の引手長の長いものが多い点は百済地域の傾向に類似するが、16cm～18cmに集中する点は、百済の傾向ではなく大伽耶の傾向であり、遊環が百済地域と共に、大伽耶地域に積極的に導入された様子がうかがえる。

5. 日韓の差異と馬匹利用のかかわり

(1) 銜・引手の長さとは機能・技術

銜と引手の長さが比例しながら、変化している日本出土例の傾向に対し、韓国出土例では銜を一定に保ったまま、引手の長さのみ変化する。双方が長く、ないし短くなる日本の傾向は、ともすれば機能性とは無関係に当初の銜・引手長の比を保とうとしたと考えることができるが、銜を一定の長さに保つ韓国の傾向は、銜に機能的な意味を持たせ、長さに固執した可能性が考えられる。銜は馬の口に入る部分であるので、銜の長さは馬の頭の大きさ・体高といったサイズにも直結する属性である。日本より韓国出土例の銜長が大きいという点自体も馬の体高を推定する上で興味深い。銜長が一定である韓国出土例の状況は、一定の体高の馬を育てようとしたという、馬の生産管理の表れと考えることもできよう。

なぜ、馬の生産管理が必要とされたのかであるが、朝鮮半島において馬匹がより実用的に利用されたということなのだろう。用途に関しては明確には分からないが、戦闘用や通信用など、馬の大きさを均質にする必要があったと考えられる。日本列島において実用か否かという議論がなされるが、銜と引手の長さの管理の度合いを見る限り、これより高次のところで朝鮮半島出土馬具の実用性が議論されるべきだと考える。

また、銜は製作技法が変わっても、長さがそれほど変わらないことも注目される。たとえ同じ長さでも、鉄棒をS字状にまげて振る3條振りと、ただ端に環を作る1條振りや無振りのものでは、材料となる鉄棒の長さや径の差は大きく、それらを折り曲げて振る手間の差も大きい。1條振りや無振りの導入は鍛接技術の進歩を示す(諫早2005)一方で、コストの減少や製作の簡略化という意味でも、意義が大きいと考えられるのである。

一方で、引手の長さは朝鮮半島において時期を追って長大化する傾向にある。スキタイには引手がなく鮮卑系の馬具でも引手は短い。これに対して朝鮮半島での長い引手の採用は一種の房錘⁵⁾の役割を果たし、両手を手綱から離しての馬上での戦闘を可能にしたとの指摘がある(川又1994・金斗喆2000)。この論に従えば、引手が長ければ長いほど、重さが増して安定する上に、長いために再度掴みやすく、より実戦的な機能を持つと見ることができる。

製作技法と引手長の相関性が高く、1條振り・無振りの導入は引手長を長くすることと歩調を同じくしている。長い引手の轡を製作する要請に従って、少量の材料で長く作ることでできる1條振りや無振りの引手を採用したのではないだろうか。

(2) 朝鮮半島における地域性と馬具の型式

韓国の出土例を見ると、金官伽耶地域・大伽耶地域、新羅地域などにお

いて法量分布の集中が顕著に見られる。これには勿論時期差による部分もあるが、時期ごとの変遷を見ても、特色のある法量分布の様相を呈する。馬具の地域色に関しては、これまで鏡板の形態や立聞孔の形態、遊環の有無などが指摘されているが（金斗喆 2000）、こうした特徴はもの自体の流入や、模倣品と区別することが難しいものもあるだろう。しかし今回の分析結果は、銜や引手の長さの分布から見る限り、地域ごとに馬具が生産されていたことを印象付けうるものである。

地域ごとの特色で注目される点として、ひとつは百濟地域における引手の長さがある。百濟地域における引手長は、4世紀代に他地域よりも短い法量分布からスタートする。その後も幅広い分布ではあるが、5世紀前半からすでに20cm前後の引手長のものを含み、みな1條振りもしくは無振りの引手である。百濟地域では鑣轡が大量に出土し、金銅装などの装飾的なものが極めて少ないことが特徴である。前述のように製作技法と引手長の相関性の高さから考えれば、高句麗や新羅との交戦の中で、長い引手の轡を大量に製作する要請に従い、少量の材料で長く作ることのできる1條振りや無振りの引手を採用したと考えられないだろうか。

もう一点は、新羅地域の銜・引手長の法量分布である。金官伽耶地域や大伽耶地域もそれぞれ集中した法量分布を見せるが、新羅地域は特に密な分布を示す。詳しくは別稿を用意しているが、新羅地域に関しては、朝鮮半島の諸地域の中で唯一、鏡板の形態や法量の著しい一致が見られ、規格生産がなされた可能性がある。そのように考えると、銜・引手長も規格性をもって生産された可能性が考えられるのである。

また、分析の部分でも述べたが、こうした地域ごとの特色を、轡の型式や技術差ごとの法量分布とあわせて考えると興味深い。遊環を持つ轡の法量分布と百濟・大伽耶の法量分布を見比べてみよう。遊環を持つ轡は引手長16～18cmや20cm以上に密な法量分布が見られる。これは百濟・大

伽耶のそれぞれの分布の一部ずつをあわせたような分布となる。遊環は百濟地域の特徴とされているが(金斗喆 2000)、百濟の馬具にも遊環を持たないものがあり、むしろ大伽耶地域との連繫の中で採用されたことが分かる。

(3) 日本列島の銜・引手長と馬具生産

日本列島の銜・引手長は、朝鮮半島の例と比べると、格段に地域差が少ない。ここではまず、共通して見られる時期的な変遷からその背景を考えていくことにしよう。

5世紀後半から6世紀前半にかけては、どの地域も法量がばらついている。5世紀後葉ないし末ごろから、日本列島では馬具生産がはじまったと考えられ、6世紀前葉には鏡板や杏葉に対する規格生産が開始されたと推定される(田中 2004)が、銜や引手の長さにはまではあまり気を遣われなかったのであろうか。また後述するように、この時点では朝鮮半島の馬具など多様な系譜のものを含んでいる可能性も高い。

このような状況が次の6世紀後半になると、どの地域でも、銜8～10cm、引手15～20cmに集中してくることは注目される。東海地域・奈良・兵庫・群馬・埼玉など日本各地でこうした傾向を示すことから、この時期には規格的な地方生産を考えるべきではなく、中央での集中した生産を考えてもよいだろう。日本列島の馬具生産において6世紀後半(TK 43型式期以降)は、長年用いられ続けたf字形鏡板付轡がなくなり、あらたに奈良県藤ノ木古墳出土例などに見られるような透かし彫の心葉形鏡板付轡や杏葉といった「新羅系」馬具が入ってくる(千賀 2003)、また素環状鏡板付轡が全国的に増えていく(岡安 1984)など、大きな変革があった時期である。また金属器生産全体では寺院造営など新たな分野にも対応しなければならぬ時期であり、生産体制の再編成が行われ、その過程で銜や

引手の法量規格も整ってきたのではないだろうか。

その後7世紀代に入ると、銜・引手長は再びばらついてくる。集中した生産が行われなくなり、生産管理が緩んだか、地方生産が開始された可能性が考えられよう。

ところで鉄器の地方生産に関しては、6世紀後半の鉄鏃の地方生産・地域性が指摘されている（尾上1993）。ただし当時の馬具生産と鉄鏃生産では技術レベルに依然として差があったのではないかと考える。金銅装の馬具はもちろん、最も簡素なつくりを持つ素環状鏡板付轡においても、6世紀中ごろによりやぐ数が増え始める段階であり、馬具の構造や組み合わせを理解しての生産は、その直後の6世紀後半にすでに地方で軌道に乗っていたとは考えられないのである。補修痕の研究においても（栗林2004）、全国的に補修例が急増するのはTK 209型式期以降であり、TK 43型式期には数例見られるにすぎない。補修よりも馬具自体の製作はより高次の技術段階のはずであり、馬具自体の製作開始はこれよりは遅れると考えられる。

ただし、6世紀後半における法量の共通性の捉え方も、九州の佐賀・熊本・宮崎という地域には全く適用できない。6世紀後半の法量の集中がこれらの地域には見られないことは注目される。九州における地方生産は宮代栄一によって指摘されているが（宮代1998）、それを裏付けるものとなろう。

（4）銜・引手長の法量分析の可能性

最後に予察めいたものにはなるが、銜・引手長の法量分析の可能性について考えてみたい。

5世紀後半、6世紀前半のようにばらついている場合、前述のように生産の不安定さであるのか、異なる系譜のものが混じっているのか判定することは難しい。ヒントになるのは、朝鮮半島例の法量分布である。もし類

似するものがあれば、その系譜のものとも考えることもできる。逆に類似するものがなければ、日本列島の初期の生産の実態を知ることができるだろう。

筆者は6世紀後半の銜・引手の分布の集中に関しては、中央での生産ではなかったかと考えている。ただし、それ以前や以後の地方で見られるさまざまな法量の分布に、豊かな朝鮮半島との地域間交流の諸相を見ることは可能だと考える。本稿では詳しく踏み込めなかったが、各地域の古墳や種々の古墳副葬品をあわせて検討していくことで、微細な交流の様相が明らかになっていくと考えられる⁶⁾。

おわりに

以上のように、試論的な部分は多いが、轡における銜と引手の長さ、一定の地域性や時間の流れが現れることを証明できたと思う。すなわち、朝鮮半島においては法量分布の地域性が明瞭にわかれ、地域ごとの馬具に対する志向の違いも指摘される。一方で、日本列島の例ではどの地域も類似した法量分布を見せるものの、若干の地域性は認められた。また朝鮮半島の例は地域や時期を通じて、銜長を一定の長さに保っており、馬匹の生産管理を行なっている可能性も指摘できた。法量分布の類似性をどのように認定するかという点にはまだ課題が多いが、銜や引手の長さは客観的な指標であり、これをもとに地域性を設定することができれば、模倣や他地域の製品の流入などを判別する基準となり、今後の馬具研究に有益であろうと考えられる。今後ほかの属性なども合わせて検討していきたい。

本稿は、2006年に韓国釜山大学校へ交換留学した際に得た着想をもとにしている。留学の機会を与え、快く送り出してくださった、都出比呂志教授、福永伸哉教授、高橋照彦准教授、寺前直人助教、大阪大学考古学研究室の皆様、そして10ヶ月間の在学中に、並々ならぬ精神的、学問的な

御指導と御援助を下さった、申敬澈教授、金斗喆助教授、全玉年先生に厚く御礼を申し上げます。また韓国での留学生活・研究において多大に御指導・御援助くださった以下の方々に、末筆ながら厚く御礼を申し上げます。

安星姫・李昌熙・尹亨準・金東潤・黄敬美・張京柱・柳渭男・崔文禎・朴美賢・平郡達哉・村松洋介・諫早直人・朴天秀・権五栄・禹在柄・成正鏞・柳昌煥・李尚律・張允禎・韓志仙・権度希・李炫姪・釜山大学校考古学科の皆様・釜山大学校博物館の皆様（順不同）

注

1. このほか宮代栄一・谷畑美帆は、轡の各部分の法量の多変量解析をおこなうなかで、銜と引手の長さも分析対象としており、長いものから短いものへという変化の方向を指摘している（宮代・谷畑2002）。
 2. 相関関係としては、鉄地金銅張鏡板付轡が鉄製環状鏡板付轡に比べて銜・引手長共に長い傾向を指摘しているが、「装飾性に乏しい群馬県剣崎長瀨西13号土坑出土例が管見の範囲で最長の銜を有することは、このいずれの想定をも否定する材料となる」と自ら疑問を呈している（松尾2005 p.132）。
 3. 鑣轡は、銜の外側の環に鑣を差し込むため、環が大きく、銜長の数値がその分大きくなることに注意しなければならないが、図5の型式別の法量分布において鑣轡の分布を少々差し引いても、一定の分布傾向を充分捉えることができる。
 4. 板状の轡は、板状の部分は残りやすいが、それに伴う銜や引手の部分は、板部分が数cm残るのみで折れてしまうことが多い。
 5. 房錘とは、川又正智が紀元前7世紀のアッシリアの彫刻において手綱の先に房のような錘があることから名づけたもので、手綱を放しても手綱の位置が一定の位置に残り、馬を安定させる働きがあると推定した（川又1994）。金斗喆はこの説を、朝鮮半島や日本列島で長い引手を採用する理由に援用した（金斗喆2000）。
- また、乗馬において、回転や停止など、騎手の意思をより強く伝えるときには、手綱を短く持つことが重要だという（服部緑地乗馬センターにて、ご教示を得た）。現在の乗馬における轡には引手がないが、引手近くを持つことによって、手綱を短く持つことと同様な効果があるかもしれない。
6. 九州以外の地域に関しても、法量分布の地域差は小さいものを見逃すこと

のできないものであり、今後の検討が必要である。

参考文献

- 尼子奈美枝 1997「金の轡と鉄の轡」『元興寺文化財研究所 創立三十周年記念誌』
- 諫早直人 2005「朝鮮半島三国時代における轡製作技術の展開」『古文化談叢』
54、九州古文化研究会
- 大谷猛 1976「法皇塚古墳出土の馬具について」『法皇塚古墳』
- 岡安光彦 1984「いわゆる「素環の轡」について」『日本古代文化研究 創刊号』
PHALANX—古墳文化研究会
- 岡安光彦 1985「環状鏡板付轡の規格と多変量解析」『日本古代文化研究』第2号
PHALANX—古墳文化研究会
- 尾上元規 1993「古墳時代鉄鍬の地域性」『考古学研究』40 - 1 考古学研究会
- 小野山節 1959「馬具と乗馬の風習」『世界考古学大系』第3巻日本Ⅲ
- 川又正智 1994『ウマ駆ける古代アジア』講談社
- 金斗喆 1991『三国時代轡의 研究』（慶北大学院碩士学位論文）
- 金斗喆 2000『韓国古代馬具의 研究』（東義大大学院博士學位論文）
- 栗林誠治 2004「馬具の生産と地域展開」『鉄器文化研究集会第10回記念大会
鉄器文化の多角的探求』鉄器文化研究会
- 権度希 2006「百濟馬具의 研究」『崇実史学』
- 早乙女雅博 2000『朝鮮半島の考古学』同成社
- 酒井清治 2001「倭における初期須恵器の系譜と渡来人」『第7回加耶史国際学
術会議4～5世紀東亜細亜社会と加耶』金海市
- 白井克也 2003「新羅土器の型式・分布変化と年代観」『朝鮮古代研究』第4号
朝鮮古代研究刊行会
- 申敬澈 1994「加耶初期馬具에 대하여」『釜大史学』第18輯 釜山大学校史学
会
- 鈴木一有 2002「経ヶ峰1号墳の再検討」『三河考古』15
- 田中由理 2004「f字形鏡板付轡の規格性とその背景」『考古学研究』51 - 2
考古学研究会
- 千賀久 2003「日本出土の「新羅系」馬装具の系譜」『東アジアと日本の考古学』
Ⅲ 同成社
- 田辺昭三 1966『陶邑古窯址群』Ⅰ 平安学園考古学クラブ
- 松尾昌彦 1996「補修痕のある馬具」『伊那』44 - 6、伊那史学会

- 松尾昌彦 2005「馬具研究と「分布論」』『馬具研究のまなざし』古代武器研究会・鉄器文化研究会
- 宮代栄一 1998「古墳文化における地域性」『駿台史学』102 駿台史学会
- 宮代栄一・谷畑美帆 2002「古墳時代馬具に見られる法量と型式」『日本考古学協会第 68 回総会』日本考古学協会
- 山田良三 1974「古墳出土の馬具」『日本古代文化の探求 馬』社会思想社
- 李尚律 2001「天安 斗井洞、龍院里古墳群의 馬具」『韓国考古学報』第 45 輯 韓国考古学会
- 柳昌煥 2000「大加耶圈馬具의 變化와 画期」『鶴山金廷鶴博士 頌寿紀念論叢 韓国古代史와 考古学』同刊行委員会
- 柳昌煥 2006『加耶馬具의 研究』(東義大大学院博士学位論文)

分析に用いた資料の出典

(紙幅の都合により一部割愛した。ご寛恕賜りたい。)

〈日本〉

- 群馬県古墳時代研究会 1996『群馬県内出土の馬具・馬形埴輪』
- 関義則・宮代栄一 1988「県内出土の古墳時代の馬具」『埼玉県立博物館紀要』14、埼玉県立博物館
- 東海古墳文化研究会 2006『東海の馬具と飾大刀』
- 宮代栄一・白木原直 1994「佐賀県出土の馬具の研究」『九州考古学』69 九州考古学会
- 宮代栄一 1995「宮崎県出土の馬具の研究」『九州考古学』70 九州考古学会
- 宮代栄一 1996「熊本県出土の馬具の研究」『肥後考古』9 肥後考古学会
- 宮代栄一・谷畑美帆 1996「続・埼玉県出土の馬具」『埼玉考古』32 埼玉考古学会
- (奈良県・兵庫県)
- 泉森皎(編) 1982「南阿田大塚山古墳発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1980年度 橿原考古学研究所
- 網干善教 1959「吐田平古墳群」『奈良県文化財調査報告書』第 4 集
- 伊藤勇輔(編) 1978『兵家古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 37 冊 奈良県教育委員会
- 河上邦彦ほか編 1976『葛城・石光山古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 31 冊 奈良県教育委員会
- 木許守 2005『巨勢山古墳群 V』御所市文化財調査報告書第 28 集 御所市教育委員会

- 木許守・藤田和尊(編)2002『巨勢山古墳群 IV - 巨勢山 74・75 号墳の調査 -』
御所市文化財調査報告書第 26 集 御所市教育委員会
- 小島俊次「天理市石上町狐ヶ尾の古墳群」『奈良県史蹟名勝天然記念物調査抄報』
第 13 輯 1960
- 関川尚功・卜部行弘(編) 1987『与楽古墳群』奈良県文化財調査報告書第 56
集 橿原考古学研究所
- 伊達宗泰ほか 1962『大和二塚古墳』史蹟名勝天然記念物調査報告第 21 冊
奈良県教育委員会
- 伊達宗泰(編) 1981『新沢千塚古墳群』奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告
第 39 冊 奈良県教育委員会
- 千賀久(編) 1988『寺口忍海古墳群』新庄町文化財調査報告書第 1 冊 新庄
町教育委員会
- 奈良県教育委員会 1956『珠城山古墳』
- 奈良県教育委員会 1972『烏土塚古墳』(奈良県文化財報告第 27 集)
- 奈良県教育委員会 1975『天理市石上・豊田古墳群 I』奈良県文化財調査報告 20
集
- 奈良県立橿原考古学研究所 1978『桜井市外鎌山北麓古墳群』奈良県史蹟名勝
天然記念物調査報告第 34 冊
- 奈良県立橿原考古学研究所 1993『龍王山古墳群』奈良県史蹟名勝天然記念物
調査報告第 68 冊
- 奈良県立橿原考古学研究所 1997『越部古墳』奈良県文化財調査報告書第 82 集
- 奈良県立橿原考古学研究所 2003『後出古墳群』奈良県史蹟名勝天然記念物調
査報告第 61 冊
- 奈良県立橿原考古学研究所 2003『大和今池 1 号墳・2 号墳』奈良県文化財調査
報告書第 101 集
- 小野市教育委員会 1974『高山古墳群調査報告書』小野市文化財調査報告書第
6 冊
- 加古川市教育委員会 1965『印南野』加古川市文化財調査報告 3
- 但馬の古墳調査委員会 1979『原始古代の但馬』
- 兵庫県多可郡加美町教育委員会 1999『奥豊部 1 号墳』加美町文化財報告 3
- 加東郡教育委員会 1984『名草 3 号墳・4 号墳』
- 兵庫県教育委員会 1987『龍子向イ山』兵庫県文化財調査報告第 51 冊
- 兵庫県教育委員会 1991『高川古墳群』兵庫県文化財調査報告第 97 冊
- 兵庫県教育委員会 1993『石垣山古墳群 石垣山遺跡』兵庫県文化財調査報告
第 129 冊

- 兵庫県教育委員会 1995『姫路市所在 西脇古墳群』兵庫県文化財調査報告
第 141 冊
- 宮川禎一・矢野健一 1999「兵庫県加西市剣坂古墳調査報告」『辰馬考古資料
館 考古学研究紀要 3』財団法人辰馬考古資料館
- 吉川町教育委員会 1972「実楽古墳調査報告書 兵庫県美郷郡吉川町」『中国高
速道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 - 神戸市八多遺跡、吉川町実楽古墳、
福崎町桜下池遺跡 -』兵庫県文化財調査報告書第 7 冊
- 〈韓国〉
- 慶星大学校博物館 2000『金海 大成洞古墳群 I - 概報 -』(慶星大学校博物館
研究叢書 第 4 輯)
- 慶星大学校博物館 2003『金海 大成洞古墳群 III』(慶星大学校博物館研究叢書
第 10 輯)
- 東義大学校博物館 2000『金海 良洞里古墳文化』
- 釜山大学校博物館 1983『東萊 福泉洞古墳群 I』(釜山大学校博物館遺蹟調査
報告 第 5 輯)
- 釜山大学校博物館 1985『金海 禮安里古墳群 I』
- 釜山大学校博物館 1990a『東萊 福泉洞古墳群 II』(釜山大学校博物館遺蹟調
査報告 第 14 輯)
- 釜山大学校博物館 1990b『東萊 福泉洞古墳群 第 3 次調査概報』
- 釜山大学校博物館 1996『東萊 福泉洞古墳群 III』(釜山大学校博物館遺蹟調査
報告 第 19 輯)
- 全玉年・李尚律・李賢珠 1989『東萊釜山福泉洞古墳群第 2 次調査概報』
- 嶺南大学校博物館 1999『時至의 文化遺蹟 IV - 古墳群 3』
- 嶺南文化財研究院 2002『慶州 九於里古墳群 I』
- 嶺南文化財研究院 2005『達城 汶山里古墳群 I』
- 韓国文化財保護財団 1998『尚州新興里古墳群』(學術調査報告第 7 冊)
- 韓国文化財保護財団 1999『尚州城洞里古墳群』
- 韓国文化財保護財団 2000『清原主城里遺蹟』(學術調査報告第 78 冊)
- 公州大学校博物館 2000 a『龍院里古墳群』
- 公州大学校博物館 2000 b『斗井洞遺蹟』
- 嶺南大学校博物館 2000『慶山林堂地域古墳群 V』(學術調査報告 第 35 冊)
- 嶺南大学校博物館 2003『慶山林堂地域古墳群 VII』(學術調査報告 第 44 冊)
- 慶尚大学校博物館 1989『晋州加佐洞古墳群 1 ~ 4 号墳』
- 慶尚大学校博物館 1988 ~ 2000『陝川 玉田古墳群』 I ~ IX
- 国立昌原文化財研究所 1997『咸安道項里古墳群 I』(學術調査報告 第 4 輯)

- 国立昌原文化財研究所 1999『咸安道項里古墳群Ⅱ』(學術調查報告 第7輯)
- 国立昌原文化財研究所 2001『咸安道項里古墳群Ⅳ』(學術調查報告 第13輯)
- 朴東百・秋淵植 1987『昌原 道溪洞古墳群Ⅰ』昌原大学校博物館
慶南發展研究院歷史文化센터 2004『咸安末山里 451 - 1 番地遺蹟』
- 忠北大学校博物館 1983『清州 新鳳洞百濟古墳群 発掘調査報告書 - 1982年
度調査 -』(調査報告 第7冊)
- 忠北大学校博物館 1990『清州 新鳳洞百濟古墳群 発掘調査報告書 - 1990年
度調査 -』(調査報告 第24冊)
- 忠北大学校博物館 1995『清州 新鳳洞古墳群』(調査報告 第44冊)
- 忠北大学校博物館 2005『清州 鳳鳴洞遺蹟(Ⅱ)』(調査報告 第16冊)
- 文化公報部 1969『慶州皇吾里第1・33号・皇南里第151号古墳発掘調査報告』
- 文化財管理局 1975『慶州地区古墳発掘調査報告書』1輯
- 文化財管理局文化財研究所 1993・1994『皇南大塚Ⅱ(南墳) 発掘調査報告書』
- 啓明大学校行素博物館 2006『星州星山洞古墳群:第38・39・57・58・59号墳』
啓明大学校行素博物館遺蹟調査報告 第13輯
- 東亜大学校博物館 1992『昌寧 校洞古墳群』古蹟調査報告 第21冊
- 東亜大学校博物館 2005『固城 松鶴洞古墳群』古蹟調査報告第37冊
- 金載元 1948『壺孑塚斗 銀鈴塚』
- 小泉頭夫・野水健 1930『慶尚北道達城郡達西面古墳調査報告』『大正12年度
古蹟調査報告』1冊
- 梅原末治 1932『慶州金鈴塚・節履塚発掘調査報告』『大正13年度古蹟調査報告』
1冊
- 斉藤忠 1937『慶州皇南洞109号墳・皇吾里14号墳調査報告』『昭和9年度古
墳調査報告』1

(大学院博士後期課程学生)

요약

일본·한국 출토 재갈의 규격 비교 검토
- 함(衡)과 인수(引手)의 길이에 주목하여 -

田 中 由 理

일본열도의 고분시대 및 한반도의 삼국시대에 사용된 마구에 관해서, 재갈을 구성하는 부품인 함(衡)과 인수(引手)의 길이를 대비하면서 비교검토 해 보았다. 그 결과, 재갈의 함과 인수의 길이에 일정한 지역성이나 시간의 흐름이 나타나는 것을 증명할 수 있었다. 즉 한반도에서는 규격의 분포의 지역성을 명확하게 나눌 수 있어서, 신라나 백제, 가야 등 지역마다 마구에 대한 선호도의 차이를 지적할 수 있었다. 한편, 일본 열도에서는 대부분 지역에서 규격이 유사하게 분포하고 있었다. 또한 한반도의 예는 지역이나 시기를 통해서 함은 일정한 길이를 유지하고 있어서, 마필의 생산관리를 행하고 있는 가능성도 지적할 수 있었다. 규격 분포의 유사성을 어떻게 인정하는지에 대해서는 아직 과제로 남아있지만, 함이나 인수의 길이는 객관적인 지표이고, 이것을 바탕으로 지역성을 설정할 수 있다면, 모방이나 타지역의 제품의 유입을 판별하는 기준으로 되어서 금후의 마구연구에 유익하다고 생각된다.

キーワード：古墳時代，三国時代，衡と引手，法量分布，地域性